社会科教育

奈良県小学校教科等研究会
社会科部会
第73号

第62回奈良県小学校社会科研究大会

平成27年11月27日　天理市立櫟本小学校

「社会的な見方・考え方を深め、よりより社会の形成に参画する力を育てる社会科学習」を大会主題とし、天理市立櫟本小学校で県大会が行われました。櫟本小学校では、『「調べたことや考えたことを表現する力」を育てる授業の創造』を主題として研究を進めてこられました。

ともに学び、高め合う子どもに

公開授業では一・二年生は自分らしく発表する授業。三・四年生では学習し考えたことをホワイトボートやポスターに整理して学び合う授業。五・六年生は、資料や聞き取りをもとに話し合い学習課題を考え深める授業。学年に応じた話し合い（ねり合い）活動で子どもたちが活発に意見を伝え合う姿をみることができました。

また、研究を通して地域を改めて見つめ直し教材化できたことや、教職員が一丸となり教材研究をして子どもたちと学習することができたなど取り組みの成果も伝えられました。

社会科の授業と社会科教育の役割

奈良県教育委員会尾﨑和弘指導主事の記念講演の中で、「どうしてなのか」「なぜ」という子どもの疑問から学習をスタートし課題を追究する中で、解決とともに新たな疑問に気付き次の課題を追究していくスパイラルする学習が大切である。「何を知っているか」という知識だけではなく、「知っていることを使ってどのように社会と関わるか」という知識を活用する力も大切であるとお話がありました。

18歳に選挙権が引き下げられるなど、変化の激しい社会において社会科教育の果たす役割が大きくなってきています。社会科で「何を学ばせ」「どう学ばせるのか」の中身と質をしっかりと考え授業を組み立てていく必要が増してきています。

学年別分科会での研究協議の概要

第3学年部会

お店ではたらく人々の仕事

奈良市立大宮小学校
教諭　池見　繁

【本実践における提案】

研究主題に迫るために、「子どもの疑問を大切にした問題解決的な学習過程を組み込むこと」「人の営みに学ぶこと」「ねり合う学習活動を大切にすること」を大切に考えた。そして、本実践の研究仮説を、「主体的な学習活動の中で、人の営みを理解し、そこで獲得した知識を基に児童同士が話し合うことで、社会的事象に対する見方・考え方が深まり、よりよい社会の形成に参画する力が育つ」と設定した。さらに、「よりよい社会の形成に参画する力」を、「賢い消費者として多面的な視点から買い物を考えられる姿」「現代社会が抱える高齢者の買い物の問題について考えること」の二つの姿から捉えようと考え、実践を進めた。

また、本実践では、問題解決に向けて話し合い、表現する活動における児童の思考・判断・表現力を、事前に作成したルーブリックを用いて評価した。

【みつめる】では、買い物調べを行い、子どもたちの中での買い物を身近にしたうえで、「なぜスーパーマーケットではたくさんの家の人が買い物をしているのだろう」という学習問題を設定し、調べる計画を立てた。【しらべる】では、消費者側の視点を考えるために、家の人にインタビューを行い、販売者側の視点を考えるために、お店への見学や聞き取りを行った。さらに、他地域とのつながりにも目を向けさせた。【ふかめる】では、「家の人にとって買いやすいお店はA店とB店、どちらのお店？」というテーマを設定し、ねり合いを行った。その後、自分が選んだお店とその理由をまとめ、家の人に確認のインタビューを行い、再度同じテーマで話し合いを行った。【ひろげる】では、お年寄りが買いやすいお店を考える活動を行った。

成果としては、一つめが複数のお店を見学できたことで、お店の工夫を客観的に捉えることができた。二つめは、ねり合いの後に家の人に話を聞いて再度話し合わせたことで、買い物をする側が自分のニーズに合わせてお店を選択していることを多くの児童が理解できたことである。三つめは、【ふかめる】・【ひろげる】段階での児童の思考・判断・表現する能力について、事前に作成したルーブリックに照らし合わせて評価したことで、客観的にみとることができた。ルーブリックがあることで、同じ学年の先生同士で話し合い共通理解をしながら評価できた。

本実践を通して、「消費者がなぜ、その店を選んで買い物をしているのか」・「お店がどのような工夫をして、消費者のニーズに寄り添っているのか」ということを理解することができた。ねり合いによって、児童の多面的に買い物を捉えられる姿が

分科会での提案の様子

見られるようになったことから、社会的事象に対する見方・考え方が深まり、よりよい社会の形成に参画する力が育ったと言える。

【研究協議から】

・産地調べの際に、地図を使って確認したのか→地図の活用はしていない。都道府県の名前をおさえた。子どもたちは奈良市の地図しか持っていない。

・お年寄りが買いやすいお店を考えるときは、お年寄りのインタビューをもとに考えたのか。メモの取れない児童は難しいのでは。→メモを取った児童のものを活用して、お店を考えた。

・買い物調べなど、やりとりがスムーズにできない家庭に対しての支援はどのようにしたのか。→返ってこない家庭もあったので、電話や通信でお願いした。全児童分は回収できなかったが、家庭の聞き取りができていない児童も、見学をしたり分かったことをまとめたりして、身近に感じさせることができたと思う。

・【ねりあい】の時に、教師と児童でA店とB店のイメージの捉え方に差があると言っていたが→仮想の店を設定したからか、特徴が大人目線で、距離や数など、子どもたちにイメージを持たせることができなかった。買い物の主体は保護者なので、自分自身の考えになりにくかった部分もあるが、三年生なりに中心概念に迫っていくことはできた。

・ねり合いの後に、保護者に聞くことはいいなと思う。ねり合いは、課題を「～であれば」というように状況を設定しないと広がらないのではないか。

・評価は子どもの学力を付けさせるものなので、ルーブリックのような手法を使うのはいい。数はどんな変遷にしたのか。→数の変遷については、具体的な数値は追っていない。はじめはB店がいいという意見が多かったが、後半はどちらにもいいところがあるんだなという視点でみることができるようになっていた。

・【ねりあい】の時に、どんな条件をつけるのかをよく考える必要がある。

（子どもがイメージしやすいものを）

【指導助言】

奈良県県教育委員会学校教育課
指導主事　尾﨑　和弘 先生

・人の営みに学ぶという視点

人間を通して学ぶことが前提であり、本実践では家庭とつながって学習できた。おうちの人の意見を出し合うことで、もう一歩深めてほしかった。自分だったらどうするかということを、学びの中に生かしてほしい。

・ねり合いについて

ねり合いは共同的な学びである。問いに対して双方のやり取りが前提であり、そのやり取りが保障されていないとねり合っている意味がない。最後は、ねり合った結果として、自分の意見を自分の言葉で言えることが大切である。また、子ども同士だけでなく、教師とのやり取りが保障されていることも前提であり、ストライクゾーンを狭めてしまないような声かけが必要である。（「いいね」ではなく「なるほどね」）

・仮想のものを取り上げることについてメリット、デメリットの両方を考えることが必要である。実際のものを取り上げることは、深い思考力を生み出せるが、近づきすぎるとどうなのか。ある一定の条件を設定して考えることで、考えを深めることはできる。

・社会参画は参加とは違う。参画とは主体的に高められることである。発達段階に応じた問いが大切である。小学校では、身近な地域で考えていけばいいのでは。

・三、四年生の学習では、「教科書を」ではなく、「教科書で」教えていくこともできる。独自の問題も視野に入れながら進めていくことで、知識の理解度を判断していけるのでは。授業と評価のやりかたを一体化させていくことが大切である。

（桜井小学校　東　香奈）

第4学年部会

くらしとごみ
―めざそうきれいな町―

御所市立名柄小学校
教諭　福岡　真耶

【本実践における提案】

学習課題を解決していく過程で新たに見つけた課題をねり合いにより解決しようとすることがよりよい社会の形成に参画する力を育てることにつながるという仮説のもと「確かな教材作り」「ねり合いの重視」「学びに生きる評価」の三つの視点で研究実践した。

確かな教材作りでは、二つのことを工夫した。一つ目は、家庭から出るごみについて調べたり、ごみ収集車がごみを収集するところを見学したりすることで、ごみの臭いや重さ、量などを体感させた。二つ目は、おうちの人や学校の業務員さん、クリーンセンターの方から話を聞いたり、図書室の本、インターネットで調べたりすることで、興味・関心を持たせた。

ねり合いの重視では、「リサイクルは良いかどうか」をテーマに「良い」「良くない」の二者択一で話し合わせた。二者択一にすることで、自分の立場を明確にでき、よりよいねり合いができると考えたからである。

本実践の評価は、毎時間終了後に振り返りを書かせることで、指導者が次時以降の指導に生かしていった。

【研究協議から】

・深める段階で、牛乳パックと牛乳ビンを見せて、リサイクルだけではなく、みんなでごみを減らしていくことが大切だと、児童が気づき、深いねり合いになった。

・いらない紙をすぐに捨てていた子どもたちが、学習後、余った紙を箱に集めて再利用するようになった。

・たくさんの人々に出会う実践がよかったが、ねり合いの中に人々の登場がなかったのが残念だった。

・児童が意見を持ちやすいようなねり合いのテーマを設定する必要があるだろう。

分科会での提案の様子

【指導助言】

五條市立五條小学校
校長　芝田　瑞也 先生

・牛乳パック・牛乳ビンで児童に揺さぶりをかけることで、ねり合いが深められた。

・児童の振り返りから児童の意見の変容を細かくとらえられていた。

・今まで学習した内容がうまく生かせるテーマや中間意見も生かせるテーマも考えられるのではないか。また、二者択一のテーマの中で、指導者側の工夫を入れることでねり合いが広がるのではないだろうか。

（山の辺小学校　竹内　沙織）

第5学年部会

「これからの情報社会」
―神功情報宣言を考えよう―

奈良市立神功小学校
教諭　宮島　一彰

【本実践における提案】

本実践は、普段の生活の中で

情報ネットワークがどのように活用されているのかを知り、これから自分たちが情報の送り手受け手としてどのように情報に関わっていくべきかを考えさせることができるものであった。

そして、研究仮説をもとに「確かな教材作り」「ねり合いの重視」「学びに生きる評価」の三つの視点で研究実践をした。

確かな教材作りでは、日常生活の中の情報ネットワークの活用を見つけるということで、市立図書館への見学やコンビニの写真やチラシを使った学習を行った。また、NTTドコモからゲストティーチャーに来てもらい、ネットトラブルや個人情報の扱い方について学ぶことで情報を扱うことは便利な面と危険な面の両方を考えることができた。そして、話し合いの後「情報化が進む社会において、情報とうまく関わっていくにはどうすればよいのだろうか」を考え、「神功情報宣言」を作り発表をした。

分科会での提案の様子

ねり合いの重視では、「わたしたちはくらしの中で、情報をどのように活用していけばいいのだろうか」について話し合った。児童は、しらべる段階で学習してきたことを活かし、根拠に基づいた意見を出し合うことができた。

学びに生きる評価では、ノートに調べて分かったことや考えたことを中心に記述した。

【研究協議から】

・ねり合いの話し合いは、対立形式で行った。安全性が焦点になったが、お互い共通していた部分は、情報やネットワークを気を付けて利用することであった。

・情報と言っても、個々のニュアンスによってとらえ方に違いがでてくるのではないのか？

・事前アンケートで、携帯を持っている児童もたくさんおり、携帯電話のトラブルもあったが実践をすることで、児童の情報に対する考えに変化が出てきた。

【指導助言】

奈良市立大宮小学校
校長　西岡　敏彦先生

この実践から考えることは、社会科で育てるグローバル人材の基礎、参画、コミュニケーション力である。

・見学やゲストティーチャーによって本物に触れる教材化としてよかった。

・ねり合いによって、子どもの追究意欲、課題意識、自分事としての認識、子どもの切実感がつながるものでないといけない。

・ひろげる段階で、自分たちの学びで終わらず、学校や地域に発信していければよかったのではないだろうか。

（晩成小学校　本多　俊道）

第6学年部会

「わたしたちの願いと政治のはたらき」
―わたしたちの通学路の安全を守る人たち―

宇陀市立榛原東小学校
教諭　中本　篤志

【本実践における提案】

身近な教材から政治の働きやそれに従事した人々の営みを学び、自分たちの住む町の解決したい問題について優先順位をつける話し合いをすることで、よりよい社会にかかわろうとする児童を育てる研究実践をした。

「みつめる」段階では、通学路の安全対策はどのように進められているのという学習問題を立て、安全柵の設置前と後の写真を見比べた。

「しらべる」段階は、設置は市長や市役所が促したのではないかという意見が多かった。そこで、市の担当者から市役所や議会の働きについて聞き取ったり、租税教室を設け、税の種類や使われ方などについて聞き取ったりした。

「ふかめる」段階では、なぜ通学路の安全対策が急に進められるようになったのかを個人、グループ、学級全体の順で考えた。また、自分たちの住む宇陀市で解決したい問題についても考えた。

分科会での提案の様子

「ひろげる」段階では、市役所の方からの意見を聞き、今後の自分と政治との関わり方について考えた。実践を行って、政治に関わろうとする意識を高めることができた。

【研究協議から】

・ねり合いの前では児童の意見にばらつきが見られた。しかし、教師の話をもとに、ねり合いを進めていき、自分中心の意見から市民全体のことを考えるというように変容していった。

・ねり合いでは、児童の価値観の違いが出てきて議論が盛り上がるが、中心概念につながるような話し合いをしていかなければならない。形態自体は単元の種類によって考えていけばよい。

・個人、小グループ、全体の順で行うことで、発言しにくい児童も自信を持って全体で話せるようになる。話し合い活動、ねり合い活動をさまざまな教科で取り入れていく必要がある。

【指導助言】

田原本町立田原本南小学校
校長　沢田　政宏先生

「みつめる」のところでは二つの写真を見比べたことで、子ども達もわかりやすく意見も言いやすかった。この授業の流れは他の学校でも参考になる学習形態である。また、ポートフォリオでまとめることで自分の考えを振り返ることは、大切な学習形態である。教師は、評価基準を設定し、児童の到達度を確認する必要がある。

ねり合いでは、グループの人数も大事ではあるが、どんな問いを投げかけるかが大事になってくるので、教材研究にしっかり取り組んでいかなければならない。

（五條小学校　吉村　真一）

全国・近畿大会に参加して

平成27年度全国小学校社会科研究協議会・山形大会に参加して

香芝市立二上小学校
教諭　水町　友美

七月二日・三日に全国小社研・山形大会が開催された。大会主題は「豊かな関わりの中で学び合い、自らの生き方を考える子どもが育つ社会科学習～丁寧な子ども理解と確かな教材研究をもとに～」であった。一日目の全体会と二日目の第二会場・山形市立第二小学校での授業公開・研究会に参加した。

第二小学校では、授業づくり

の視点として「子どもが自分ごととして学習する（単元づくり）」と「子どもの思考を大切にした授業を創る」に重点をおいた授業公開と学年別授業研究が行われた。三年生では、地域にある醤油をつくっている二つの工場を、四年生では、コンビニエンスストアのゴミ箱に家庭ごみが捨てられることを、五年生では、山形で生まれた米「つや姫」を、六年生では、山形に残る古い建物「清風荘」（書院造）を取り上げていた。どの学年も地域素材を生かし、児童が社会的事象を自分ごととして捉え、考えることができるようになっていた。

五年生の公開授業は、「どうしてつや姫をつくるための条件は厳しいのか」を考える場面であった。話し合いの後に、ゲストティーチャーから、厳しい条件は米の品質を守るためであり、おいしい「つや姫」をみんなに知ってもらえば、山形の他の米を知ってもらうきっかけになり買ってもらえるからという話もあった。参加者からは、五年生では日本全体のことをとらえられる教材を取り上げないといけないという意見があった。日本全体が抱えている問題に対して、地域の人たちの工夫や努力から学ぶことができる教材づくりが必要であるなどの話が出ていた。

学年別課題研究会では、奈良県小社研六年部会として、「わたしたちの願いを実現する政治～市民の願いは実現する！香芝市デマンド交通から学ぶ～」の実践報告をした。参加者や筒井小学校尾上和久校長からは、知識の構造図の作成は指導者として欠かせないものであること、公共交通の在り方はどの地方でも今まさに問題となっていること、地域素材を教材化することが大切であること、政治は身近なものではあるが、それを子どもたちが感じることが難しいこと、政治に対して関心をもち続けることができる学習展開が求められることなどの話があった。

第53回全国小学校社会科研究協議会・広島大会に参加して

王寺町立王寺南小学校
教諭　中條　佳記

十月二十九日と三十日、全国小社研・広島大会が開催された。大会主題は「社会を見つめ、未来を問い続ける社会科教育の創造―学習意欲の向上をめざした思考力・判断力・表現力の育成―」である。三会場で授業公開、実践発表が行われ、第二会場の広島市立千田小学校の研究発表に参加した。創立が大正十三年の学校で、日赤病院のすぐそばにあった。校庭には被爆樹木が移植されており、戦後七十年たった今でも戦争の悲惨さを訴えかけてくるようだった。

会場校と被爆樹

広島県社研が掲げる研究の視点が以下の通りである。

1 達成したいねらいと子どもや時代のニーズに即した教材の開発　(1)「広島らしさ」のある教材、(2)素材から教材へ

2 学習意欲の向上をめざした問題解決的な学習過程　(1)「であう」(2)「ふかめる」(3)「いかす」

3 思考力・判断力・表現力を育成する学習活動　(1)「であう」(2)「ふかめる」(3)「いかす」

4 学習意欲の向上をめざした学習評価　(1)「学習意欲」の向上をめざして　(2)学習評価　(3)判定基準と評価の参考例

これらを踏まえた授業実践や研究発表が行われていた。千田小学校では「社会的な見方・考え方が成長し、新たな問いが生まれる授業づくり～「対話」をもとに社会的な思考・判断を促す～」ということで、県や各校の研究の中心は「思考・判断・表現」に置かれていることがよくわかった。

校内には児童の学習の様子を紹介するコーナーや、階段には常に社会科を学習できる工夫がしてあり、学習意欲を高める工夫がなされていた。教室には、今までの子どもたちの学習の流れが分かるように学習内容をまとめた模造紙が展示されていた。

学年別研究協議会では、奈良県小社研三年部会の提案として、「わたしたちのくらしとまちではたらく人びと～店ではたらく人びとの仕事～」の実践を報告した。参加者からは、ねり合いの在り方や、ひろげる段階のテーマ設定の仕方、学びを通して「社会に参画する」子どもたちの姿について質問が出された。

指導助言の郡山西小学校北村善重校長先生からは、子どもたちにとって身近なスーパーマーケットの教材を扱い、そこではたらく人たちの姿にふれることの学習効果や、ねり合いにおいて根拠や論点を明確にし、話し合いを深めていくことの必要性、さらに参画を授業に取り入れていく上で、児童が身の回りのことに問題意識を持って社会を見つめていく学習を大事にすべきというご指導をいただいた。

第62回近畿小学校社会科教育研究協議会・大阪大会に参加して

奈良市立西大寺北小学校
教諭　田中　雅代

十一月二十日、近畿小社研・大阪大会が大阪市立聖和小学校で開催された。大会主題は「社会とつながり、共に生きる子どもたちを育てる―協働して学び、「自分たちのこと」としてとらえる社会科学習―」である。

大会提案では、激動・激変する社会に主体的に参画し、協働して問題を解決し、国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として生き抜く子どもたちを育てる上で、社会科学習が担う責任・役割について述べられた。学年別研究協議会では、奈良県小社研三年部会より、「昔のくらし～人々の願いを受け継ぎ明日へ生かす～」の実践報告を行った。この実践でも社会的事象を他人事でなく、自分たちのこととして考えさせることを大切に行った。本実践における「よりよい社会の形成に参画する力」が育った児童の姿を、「道具の移り変わりの背景にある人々の願いを理解するとともに、よりよい生活を願って便利になった道具の使い方について考えようとする子ども」と設定した。さらに一人一人の考えを互いに交流し合い、それぞれの見方・考え方を深めるねり合いの場面を設定した。

指導助言の王寺南小学校山田均校長より、昔の人々の知恵や願いに対して見通しを持って学習を進めていくには体験的活動から共感的な理解が必要となり、そこから学習問題の設定がされることの大切さを指導いただいた。また、毎時間子どもたちの考えを記録していくことで学習者も指導者も変容を見取ることができたと学びに生きる評価についても助言いただいた。

記念講演では、文科省教科調査官澤井陽介先生が「社会科の課題と改善策」と題し、社会参画の態度の現状についての結果をもとに子どもたちの社会科に対する意識について講演された。

これからの小学校社会科では、大会提案にあったように、自分のこととして子どもたちが何の問題に向かっているかをぶれずに進めていくためには、まず学習問題の設定を一層重視していかねばならないことを痛感した。